

ハタチ酒プロジェクト

—二十歳に乾杯—



いわきの恵みと「ハタチ酒」

本市の農産物は、光・水・土の豊かな恵みを受けて育ちます。

年間2000時間以上と全国でも有数の日照時間、夏井川水系や鮫川水系など、山に蓄えられたミネラルを運んでくれる豊富な水源、粘土質が強く、保水力に優れ、養分を蓄える力が高い土壌。ハタチ酒には、こうした自然の恵みを受けて育てられた酒米「夢の香」が使用されています。

夢の香は、福島県で開発された酒米で、透明感のあるバランスの良い味わいと香りの高さが特徴ですが、市内でこの酒米を栽培している農家は、わずかに1軒だけとなっています。

この酒米でハタチ酒を醸造するのが、太平洋酒造（常磐）です。享保10（1725）年から300年続く酒蔵で、地産地消を理念とし、地域に密着した酒造りをしています。長い歴史の中で受け継いできた伝統と技術をもとに作られる日本酒は、9割以上が市内

で消費されており、長年に渡り、地域で愛されてきました。

日本酒づくりは、単なる酒の製造を超え、文化的で歴史的な多くの要素を含んだ活動です。一滴一滴に込められた職人の思いや地域の特徴、そして飲む人々の楽しみが共鳴し合うことで、その魅力はさらに広がっていきます。

いわきの豊かな恵みとたくさんの人々の思いが郷土愛として強く結び付いた「ハタチ酒」。ぜひ味わってみてはいかがでしょうか。

郷土愛を育むプロジェクト

いわきハタチ酒プロジェクトは、主に20歳を迎える若い皆さんに、自分たちで作った日本酒でハタチの乾杯してもらおうという取り組みで、市内の酒販店が中心となり、2018年の第1期から昨年の第7期まで、総勢71名の方が参加してきました。

本プロジェクトでは、5月の田植えに始まり、稲刈り、麴づくり、仕込み、上槽など、原料となる米作りから酒造りまでの一貫した体験を1年かけて行います。

こうした一連の体験によって、ものづくりの魅力やその奥深さを感じるとともに、酒造りに携わる「人」との出会いを通し、ふるさとといわきへの「思い」を見つめ直す、貴重なプロジェクトです。

本年3月に完成した7期生7名たちによる「ハタチ酒」。進学や就職等を機にいわきを離れた若い世代の方が本プロジェクトを通して、ふるさとといわきをどう感じたか、そこに携わる方たちの思いなど、酒造りと郷土愛をテーマに、新たな本市の魅力をお伝えします。

プロジェクトの主な活動



① 田植え（5月）



② 稲刈り（9月）



⑥ 完成（3月）



⑤ 上槽（2月）



③ 麴づくり（1月）



④ 仕込み（1月）



ふるさとを伝える仕事を



プロジェクト7期生
いとう ひまり
伊藤 向日葵さん

高校生のときに、部活動でハタチ酒を取材しました。参加者のために奮闘する皆さんの姿を見て、私も20歳になったら参加しようと思っていました。

実際に参加してみると、酒米と一般米を食べ比べさせてもらったり、蒸した酒米の独特の触り心地を感じたりと、他ではできない貴重な体験をさせていただきました。いわきで長年ものづくりに取り組んできた皆さんから刺激をもらい、いわきをさらに好きになりました。

将来は、ふるさといわきに帰ってきたいという思いが芽生え、この体験を生かし、いわきの良さを伝えていけるような仕事をしたいです。

ものづくりの良さを



酒米農家
たき まさつぐ
滝 正嗣さん

私は2021年から協力しており、今は私の水田で酒米「夢の香」を育てています。以前に栽培地として協力していた方が続けられなくなってしまいました。人と人とのつながりが大事と思い、酒米の栽培を引き継ぎました。

令和5年の集中豪雨の際には大きな打撃を受けましたが、だからこそ農産物ができると非常にやりがいを感じます。参加する皆さんには、そのものづくりの良さを感じてもらいたいです。

参加者の皆さんから若さをもっているようで新鮮な気持ちになれ、私にとっても良い経験です。

この1本に思いを込めて



太平桜酒造代表
おおひら まさし
大平 正志さん

発起人である永山さんの思いに共感して、第1回目から蔵元として参画しています。当初は教えながらできるのか不安もあり、どの工程を体験してもらうか試行錯誤しながら進めてきました。できるだけ多くの体験をしてもらいたいと思い、工程を増やすなど参加しやすい工夫をしてきました。

酒造りは、酒米農家の方に感謝して1本1本が勝負だと思っています。この取り組みをきっかけに、農家の方との連携も深まりました。

若い皆さんが酒造りに興味を持ってくれるのは嬉しく、これからも続けていきたいです。

体験で人生を豊かに



発起人・澤木屋代表
ながやま みつひさ
永山 満久さん

日本酒文化を伝えたい、若い皆さんと地域に根差した活動をしたいと思い、2015年に動き始めました。「やるからには長くやりたい」と覚悟を持ち、このプロジェクトに共感してくれる酒販店や酒蔵、米農家を探しました。販売店探しでは、完成していない日本酒の魅力を伝えることが難しかったですが、半年ほどで1期生を迎えることができました。

以前の参加者がボランティアに来てくれるなどコミュニティが育まれているのを感じます。若い方に参加していただき、この体験によって人生が少しでも豊かになることを期待しています。



若者との対話

いわき市長

内田 広之

いわきハタチ酒プロジェクトは、若者の郷土愛を育み、将来いわきで活躍する若者を生み出すきっかけになる取り組みとして期待しています。市内の中・高校生と話す時、いわき市の未来への希望を熱く語ってくれる生徒が多いことに驚きます。若者を交えた会議で「我々も政策づくりに参画させて！」と直訴されることもあります。とてもうれしいです。これまでも、いわき青年会議所などの企画で、私も若者との意見交換の場をいただき、その都度、新鮮なご意見をいただけてきました。来年は、市政60周年。この節目に、市政100周年までを見据えた政策ビジョンを、若者の意見も重く受け止めて創っていきたいです。そして、高齢者や働き盛り、子育て世代の考えもそれぞれ、若者に受け止めてもらいつつ熟慮してもらい、いわきの可能性を引き出したいです。

ふるさといわきを思う

ハタチ酒は、プロジェクトに携わった人たちの思いが凝縮されています。自分たちで植えた苗が米になり、そして香り豊かな日本酒へと成長するのとともに、今回参加した7期生7名の郷土愛も育まれてきました。1本の日本酒造りを通して育まれた「ふるさといわき」への誇りは、着実に次の世代へと引き継がれていきます。まもなく、第8期生たちの新たな「ハタチ酒」造りが始まります。